B 126　皮膚の色調と有彩色（1）

東京家政大家政　木曽山かね　○雲田直子

目的　顔面の色調と衣服の色調との関係は，適切な肌色のサンプルがないために実験する機会が非常に少ない。客観的に肌色と衣服の色の関係を見るために，昭和43年より55年迄に計測した1,187人の女子大学生の顔面の色調の内，出現率の高い色調をオレンヂ系，ピンク系，小麦色系，オークル系より選び，衣服の色との対比現象の実験の資料とした。衣服の色は最も基本となる三原色及び原色の緑，茶の5色とした。これらの実験は，今後の肌色と衣服の色の関係をみるための研究の足掛かりとするためのものである。

方法　1)実験色票の作成　縦26cm横10.9cmの灰色のラシャ紙に，縦横13cmの赤青黄緑茶の有彩色色紙を空間9cmずつあけて貼付，色紙の中央に3cm四方の肌色色票を5枚用意して貼付した。今回実験に供した肌色色票は2.5YRと10.0YRのグループで，各々出現率の高いものの内，明度彩度を考慮して3色ずつ選んだ。

2)実験の方法　対比現象の実験は，予備実験の結果視間距離を3mと14mとし，実験色票の照度300LUXで観察し，記録用紙に最も明るく見える色を記入させた。実験に参加した学生は大学1年86名，2年97名である。内正視152人，近視31人であるが，乱視は除外した。近視者の内，メガネ及びコンタクトレンズ使用者で正常視と大差ないものは，正視として扱った。

結果　何れのグループも青が肌色色票を明るく見せ，ピンク系の明るい肌色の場合，緑色と茶色が肌色を明るくする。オークル系の暗い肌色では，若干赤が肌を明るくするというものがみえた。視間距離と資料の大きさについては今後の研究にゆだねたい。